

# トビウオ通信 (H28 第 3 号)

http://www.pref.shimane.lg.jp/suigi/ (TEL 0855-22-1720)

## 《平成 28 年度上半期浮魚中長期漁況予報》

平成 28 年 3 月に開催された東シナ海～日本海南西海域にかけての対馬暖流域における主要浮魚類の長期漁況予報会議の内容を基に作成された平成 27 年度第 2 回対馬暖流系マアジ・さば類・いわし類長期漁海況予報 (H28 年 3 月 29 日発表) から、山陰沖のまき網漁業が対象とする主要浮魚の平成 28 年度上半期 (4～9 月) の中・長期的な漁模様の予測をします。

### 山陰沖における漁況(来遊)予報 [平成 28 年度上半期(4～9 月)]

マアジ:前年を下回る

マサバ:前年並みか前年を上回る

カタクチイワシ:前年並みか前年を下回る ウルメイワシ:前年並みか前年を上回る

マイワシ:前年並みか前年を上回る

※ 本文中で「上半期」は 4～9 月、「下半期」は 10～翌年 3 月 (平成 28 年 3 月は速報値)、「平年」は過去 5 カ年の平均値をいいます。

#### マアジは前年を下回る

##### 東シナ海～日本海南西海域の漁況

東シナ海～日本海南西海域における大中型まき網によるマアジの漁獲量は、増減を繰り返しており、平成 23 年に 4 万トンの漁獲があった後は 2 万 9 千トンまで減少し、平成 27 年は再び 4 万トンまで増加しました。

一方、鹿児島県から山口県の沿岸域における平成 27 年 11 月～28 年 1 月の漁獲状況は、全体としては前年・平年並みとなりました。沿岸域の漁況は、直近までの漁獲状況から今後は前年を下回り、平年並みになると予測されています。

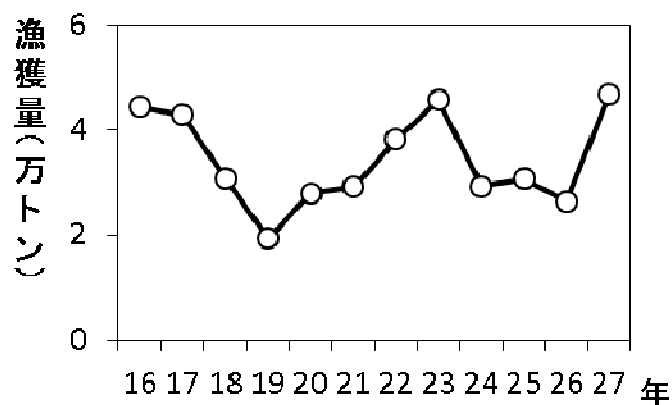


図 1. 東シナ海～日本海南西海域 (大中型まき網)によるマアジ漁獲量の推移

**山陰沖の漁況と今後** 島根県の中型まき網によるマアジの漁獲量は平成 16 年度以降、2～4 万トン程度で推移しています (図 2)。

平成 27 年度下半期は 6,655 トンの漁獲があり、前年同期（17,218 トン）の 39%、平年同期（15,123 トン）の 44% でした。

今後の漁況は、漁獲の主体となる 1 歳魚（大きさ 15～20 cm : H27 年生まれ）と 2 歳魚（大きさ 20～25 cm : H26 年生まれ）の山陰沖への来遊状況と、夏季以降漁獲対象となる 0 歳魚（大きさ 5～15 cm : H28 年生まれ）の加入状況によって決まります。1・2 歳魚の来遊状況は、山陰沖の海水温の分布状況の影響を大きく受けます。

平成 27 年の状況は、水温は 6 月の表層が高めだったものの、全体的に見ると低めで推移しました。0 歳魚の本格的な加入は平成 26 年度より遅く、9 月～10 月頃からとなりました。また、マアジ新規加入量調査<sup>\*</sup>では加入量指数が再び減少し 0.3 となりました（図 3）。低めの水温と新規加入量減少の影響を受けたためか、上半期・下半期ともに漁獲量は前年を下回りました。

マアジの成長に影響を及ぼすといわれている今期の山陰沖を含む日本海西部海域の 50m 深水温の推移は、対馬暖流域・沿岸域の水温が平年並み～やや高めと予測されていることから、山陰沖もそれに準ずると考えられます。また、今期に 1 歳魚となる平成 27 年生まれの加入状況は、直近までの漁獲状況とマアジ新規加入量調査の結果から前年を下回ると予測されます。これから山陰沖に加入してくる 0 歳魚の状況は今後調査予定ですが、前年並みとすれば、全体の来遊量は前年を下回ると予測されます。

<sup>\*</sup>マアジ新規加入量調査：山陰沖へのマアジ 0 歳魚の加入量を早期に把握するための調査です。

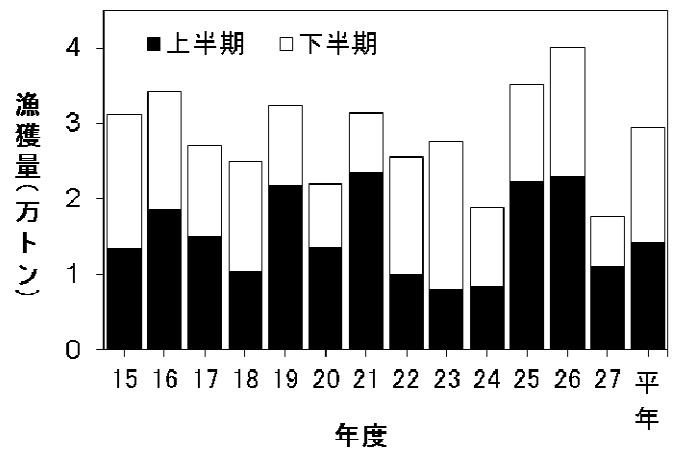


図 2. 島根県中型まき網によるマアジ漁獲量の推移 (平年は H22～26 年の平均値)

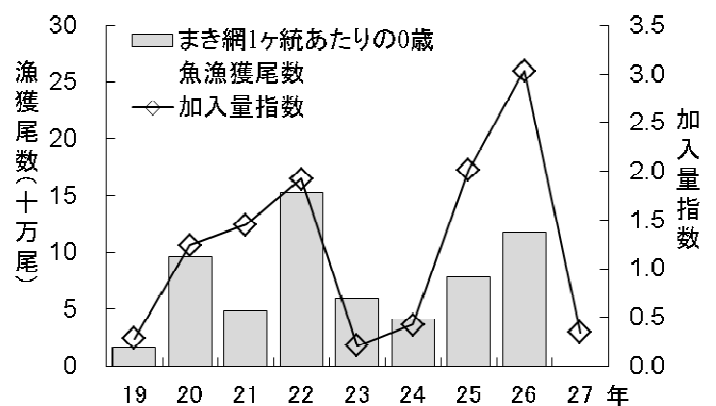


図 3. マアジ新規加入量調査による加入量指数と 6～12 月におけるまき網 (境港) 1 ヶ統あたりの 0 歳魚の漁獲尾数 (H27 年は未集計)

## マサバは前年並みか前年を上回る

東シナ海～日本海南西海域における大中型まき網によるマサバの漁獲量は、平成 22 年から減少傾向にあります。平成 27 年の漁獲量は 4 万トンと不調だった前年を上回り、やや増加しました（図 4）。

島根県の中型まき網によるサバ類の漁獲量は、主漁期にあたる下半期の経年変化をみると、5 千～2 万トンの間で増減を繰り返して推移しています（図 5）。

平成 27 年度下半期の漁獲量は 11,991 トンで、前年同期（8,443 トン）の 142%、平年同期（11,363 トン）の 105% となり、前年を上回り、平年並みの漁況でした。

4月～9月は盛漁期には当たらないため、今後漁獲は低調に推移しますが、1歳魚（25～30cm：H27年生まれ）が漁獲の主体となり、夏以降は0歳魚（15～20cm：H28年生まれ）も漁獲すると推測されます。

1歳魚の資源水準は、前年並みになるとされています。また、0歳魚の資源水準は予測が困難ですが、親魚量の水準や初期生残に関わる環境要因（海水温がやや高め、初期生残に有利）からみると前年を上回ると予想されています。従って、全体の来遊量は前年並みか前年を上回ると考えられます。

**カタクチイワシは前年並みか前年を下回る**

島根県の中型まき網によるカタクチイワシの漁獲量は、数年ごとに増減を繰り返しながら2千～1万5千トンで推移しています（図6）。

平成27年度下半期の漁獲量は2,793トンと、前年同期（704トン）の397%、平年同期（3,737トン）の75%でした。

今後の漁況は、漁獲の主体となる0歳魚（大きさ5～10cm：H28年生まれ）と1歳魚以上（大きさ12～14cm：H27年以前生まれ）の来遊量で決まります。平成22年～平成26年までカタクチイワシの資源水準は減少傾向であると推測されています。また、1歳魚は、産卵親魚の漁獲状況から前年を下回ると判断されています。近年の山陰沖では、本種は3～5月に漁獲が集中する傾向にありましたが、平成28年は3月まで漁獲量が0トンであり、5月以降は近年の傾向どおり漁獲量が減少した場合、結果として全体の来遊量は前年並みか前年を下回ると予測されます。

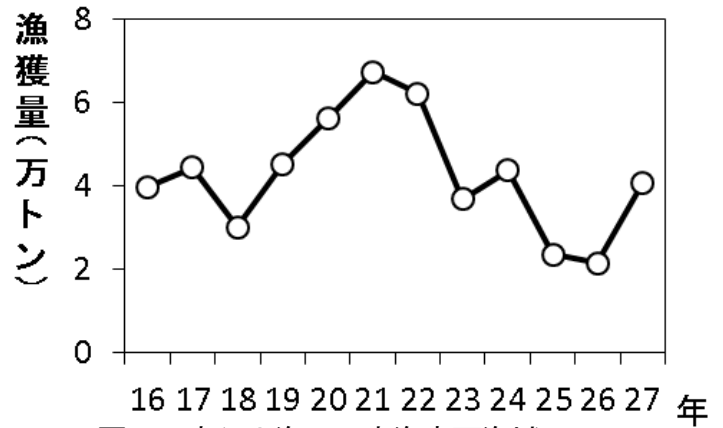


図4. 東シナ海～日本海南西海域（大中型まき網）によるマサバ漁獲量の推移

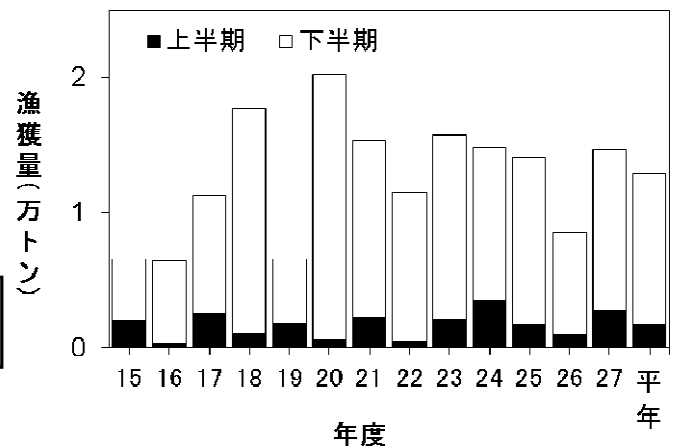


図5. 島根県中型まき網によるサバ類漁獲量の推移（平年はH22～26年の平均値）

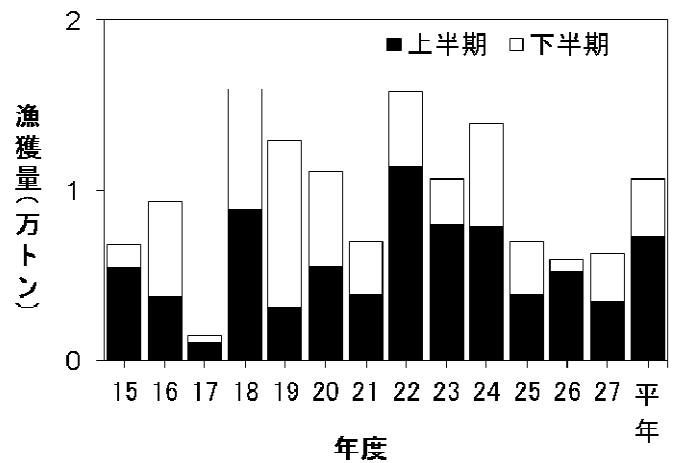


図6. 島根県中型まき網によるカタクチイワシ漁獲量の推移（平年はH22～26年の平均値）

## ウルメイワシは前年並みか前年を上回る

島根県の中型まき網によるウルメイワシの漁獲量は、平成 15 年度以降はやや増加傾向にあり、特に平成 23 年度は 1 万 6 千トンと過去 10 年間で最高の漁獲量を記録しました（図 7）。その後も 1 万トン前後で推移していたのですが、平成 26 年度は 1,760 トンと、極めて不調となりました。

平成 27 年度下半期の漁獲量は 3,116 トンと、前年同期（1,240 トン）の 251%、平年同期（7,396 トン）の 42%でした。

今後は、1～2 歳魚（大きさ 18 cm 以上：H27 年～H26 年生まれ）と夏以降の漁獲に加わる 0 歳魚（大きさ 5～15 cm：H28 年生まれ）が漁獲の主体となります。平成 28 年の推定産卵親魚量を計算すると前年を上回り、直近までの漁獲状況も前年を上回る事から、今期の来遊量は、前年並みか前年を上回ると予測されます。

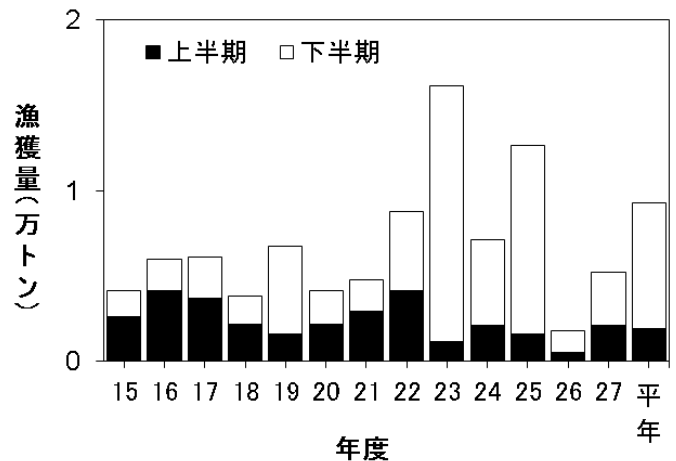


図 7. 島根県中型まき網によるウルメイワシ漁獲量の推移（平年は H22～26 年の平均値）

## マイワシは前年並みか前年を上回る

島根県の中型まき網によるマイワシの漁獲量は平成 15 年以降回復傾向にあり（図 8）、平成 26 年を除いて概ね豊漁が続いています。

平成 27 年度下半期の漁獲量は 4,853 トンと前年同期（132 トン）の 3,679%、平年同期（5,567 トン）の 87%となりました。

今後の漁況は、漁獲の主体となる 1～2 歳魚（大きさ 15～20 cm：H27 年～H26 年生まれ）と夏以降の 0 歳魚（大きさ 15 cm 以下：H28 年生まれ）の来遊量で決まります。平成 26 年生まれ（2 歳魚）の資源量は前年を大きく下回りますが、平成 27 年生まれ（1 歳魚）は平成 25 年生まれ（3 歳魚）と同程度の資源水準であると考えられています。また、0 歳魚の予測は困難ですが、直近の漁況から前年を上回ると推測され、今期の来遊量は前年並みか前年を上回ると考えられます。平成 28 年に入ってからまだまとまった漁獲は無く、予測の難しい魚種ですが、島根県にとって重要な水産資源であるため、今後の動向を注視する必要があります。

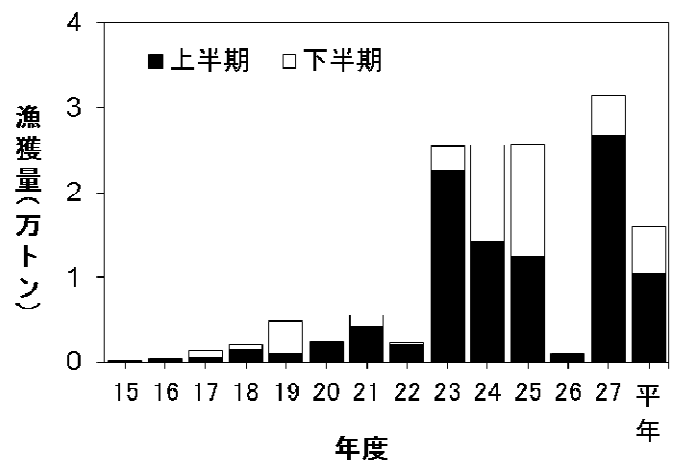


図 8. 島根県中型まき網によるマイワシ漁獲量の推移（平年は H22～26 年の平均値）